

博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

甲第146号

2017

創価大学

本号は学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規程による公表を目的として、平成29年3月18日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した甲は、学位規則第4条1項（いわゆる課程博士）によるものである。

創価大学

氏 名	ツグラッゲン・エヴェリン	
学位の種類	博士（人文学）	
学位記番号	甲第146号	
学位授与の日付	平成29年3月18日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 創価大学大学院学則第場31条第2項該当 創価大学学位規則第3条の3第1項該当	
論文題目	ゲーテにおける「生命哲学」の研究 —自然詩文・永遠・輪廻・行為—	
論文審査機関	文学研究科委員会	
論文審査委員	主査 石神 豊	本学文学研究科教授
	委員 宮田 幸一	本学文学研究科教授
	委員 伊藤 貴雄	本学文学研究科教授

〔論文題目〕

ゲーテにおける「生命哲学」の研究 ―自然詩文・永遠・輪廻・行為―

〔論文内容の要旨〕

1. 論文内容の要旨

上記提出論文は4部構成の本文のほかに、ツグラッゲン氏（以下：論者）自身の翻訳による、研究のためのゲーテ資料（翻訳・解題）3本を付したものである。

本論文全体の目次（概要）は次のとおりである（詳細は略す）。

前書き

序章 概念の定義と時代背景

第1部 ゲーテの「生命哲学」

第1章 ゲーテの「自然詩文」における「生命哲学」

第2章 「生の哲学」の由来および詩文・スピノザ論争・ゲーテとの関係

第2部 ゲーテの「生命哲学」の根柢にあるスピノザ哲学

第1章 ゲーテのスピノザ受容と研究時期

第2章 スピノザ『エチカ』がゲーテの「生命哲学」に及ぼした影響

第3部 ゲーテの「輪廻」概念と「靈魂」概念（西洋思想における）

第1章 ゲーテの生涯における「輪廻」概念の進展

第2章 ゲーテの晩年と最晩年の「輪廻」概念

第4部 ゲーテの「輪廻」概念と「行為の哲学」（東洋思想における）

第1章 ワイマール文学者に影響を与えたケンペルの『日本誌』

第2章 ゲーテに影響を与えた仏教思想

終章 ゲーテの「生命哲学」のエッセンス

付録① ゲーテのスピノザ論―スピノザ論争をめぐる書簡を中心に 翻訳と解題

付録② ゲーテの「スピノザ研究」 翻訳と解題

付録③ ゲーテの輪廻概念に関する詩 翻訳と解題

参考文献

内容の要旨については以下のとおりである。

前書きでは、ゲーテの人生における諸経験およびその内省が彼の生命哲学と呼べるものを築いていった経緯を略述するとともに、その内容を追求し検討すべき本論文全体の骨子を示す。

序章は、本論文における主要な用語、すなわち「自然詩文」「生命哲学」「生命」「靈魂」「輪廻」「業」といった言葉を定義し、時代の背景についても若干の検討をする。

第1部では、ゲーテの「生命哲学」の観点とその背景を論じる。第1章では、「自然詩文(Naturdichtung)」を解釈しなおすことによって、彼の詩人と人間としての生命哲学を明らかにし、第2章では「生の哲学(Lebensphilosophie)」という思潮の由来を確認し、またスピノザをめぐる論争についても述べることで、ゲーテの立場と位置を確認する。

第2部では、ゲーテ自身およびゲーテの詩文へのスピノザ哲学の影響を述べる。第1章ではゲーテがスピノザを研究した時期について詳しく考察し、当時のドイツ語圏におけるスピノザ受容についても論じる。第2章では、主にスピノザ『エチカ』のゲーテへの影響について論究する。またゲーテの宗教概念と宗教についての考察を述べる。

第3部では、ゲーテの「輪廻」概念および「靈魂」概念をめぐる由来およびゲーテ自身の研究について述べ、さらにオルフェウス教の影響を論じる。第1章は上記の概念が述べられる箇所を時系列で追い、注釈しつつ解釈をする。第2章はゲーテのオルフェウス教についての記述を追い、その内容を理解する。またゲーテの輪廻概念、靈魂概念と緊密に関係している諸概念について論じる。

第4部では、ゲーテが東洋思想、とくに仏教思想から「輪廻」思想を知ったのかどうかを論じる。第1章は、主にケンペルの『日本誌』がワイマールの文学者（ゲーテのほかにヘルダーやシュロッサーら）に与えた影響を考察し、近世日本がどのように理解されたかを検討する。第2章は、ゲーテが仏教の輪廻思想の知識をどのように得たのかについて論じる。

終章では、本論文の内容を振り返りつつ、ゲーテの「生命哲学」といえるもののエッセンスについて簡潔にまとめる。そして本論文としての結論を述べ、今後の研究課題についても数点にわたって述べる。

2. 論文審査結果の要旨

本論文のユニークな視点および評価しうる論点として、次のような内容があげられる。

① 論者が提案した特徴として、ゲーテの生命哲学を分析するうえでの骨子ともなる「生命哲学の3つの定義」がある。それは哲学史的な意義に理解した「生命哲学」、生命観とという一般的な「生命哲学」、そして実践的に理解された「生命哲学」である。通常の「生命哲学」理解は前2者におさまるが、論者はこれに第3の実践的な意義を加えて論じていく。すなわちこの3点によって立体的にゲーテの生命哲学を浮かび上がらせようとしている。こうした視点の導入は、ゲーテ詩文の理解において、いまだ完全に十全なものとはいえないまでも、従来の詩文理解がともすると欠落しがちであった動的な観点をはっきり導入したものとして評価できる。

②次にゲーテのスピノザ研究の第1期におけるゲーテ自身のスピノザ理解についてである。これまでのほとんどの研究では、従来ゲーテは第1期とされる1770年頃はスピノザに反対の立場をとっていたが、その後の研究によって（第2期以後に）当初の反対の立場を改めたのだと理解されてきた。しかし、論者は丁寧にゲーテの『エフェメリダス』を読むことで、実際にはすでに第1期においてもスピノザに親近感を抱いていたということ、従来言われてきたスピノザ批判は、世上に言われる「スピノザ主義」であって、スピノザその人あるいはスピノザ思想ではないことを明確にした。このことはゲーテ研究史の上でも重要な提案である。他者の理解、評価をうのみにするのではなく、自身でじかにあたるというゲーテ自身の思想理解スタイルからしても、論者の指摘は妥当性をもっている。

③第3に、本論文ではゲーテの靈魂概念を探究することで、ゲーテがいくつかの哲学用語ないし比喩的な用語をもちいていること、それによって一つのゲーテの靈魂理解の基本的性格といえるものを明らかにしたことである。代表的な表現として「エンテレヒー的モナド」がある。これ

は常に完成に向かって努力するというありかたにゲーテが理解する靈魂の性格があるということを示している。これまでむろんこうしたゲーテ思想の性格については多くの同様の指摘があるが、本論文は明確にゲーテの用語を通してそれを示しえた点が評価しえよう。

④最後に、いわゆるオリエンタリズムとゲーテとの関係である。いまだ東洋思想とゲーテに関する研究は少ないといわざるを得ない。この点について本論文はケンペルの『日本誌』を中心に、とくに日本また仏教との関係に焦点をあてて考察し、同時代のワイマール文学者から影響を受けたのであろうと結論している。ゲーテと東洋思想の関係については、さらに広範な今後の研究が期待される場所であるが、本論文がひとまずゲーテ研究のうえでひとつの明確な論点を示しえた点について評価できると思われる。

以上のように、本論文はゲーテ研究の上でいくつかの点において新しい視点、あるいは提案を示したものと見え、意義ある論文として評価できるものといえる。なお、論者の母国語はドイツ語であるが、日本語論文として今回の博士論文を提出されたことについて、日本語による外国人研究者の論文としての意義もあり、その労を多としたい。本論文を「人文学専攻博士論文審査基準」（公表）に基づき検討した結果、十分に基準を満足しうるものと認め、論文審査について合と判定した。

3. 最終試験結果の要旨

2016年12月20日に本論文についての公開発表会をもち、20名余の参加者とともに質疑応答の機会をもった。そして同日引き続き3名の審査委員による最終試験が面接の形態で行われた。

審査委員から、本論文における用語ないし翻訳語の適切さについての質問がなされた。従来のゲーテ研究における用語法との違い、またそれに伴う論者の理解について質問がなされた。さらに、本論文の論述一般について、どこまでが他人の論で、どこからが論者の論であるかがやや不明瞭である箇所があるとの指摘があった。そのほか、注のつけ方についての指摘、また重要な概念に対する理解のさらなる明瞭化を求める意見があった。

これら委員からの質問や指摘に対して論者は真摯に応答し、自身の研究法や理解についておおむね適切な回答をした。これらに基づき慎重に審査を行った結果、審査委員会の結論として、最終試験を合とすることとした。

以上